

英語力と人間性を 授業内外で育てるカリキュラムで グローバル・リーダーを育成する

（ 北海道大学 ● 新渡戸カレッジ ）

北海道大学は、グローバル・リーダーの育成を掲げて、2013年度、学部横断的な特別教育プログラム「新渡戸カレッジ」をスタートさせた。各学部での専門教育にプラスして、グローバル社会で活躍するために必要なスキルとマインドを身につけるプログラムだ。その特色は、3か月以上の海外留学の奨励や、外国人留学生との交流などで、英語力育成を支援していること、そして、社会で活躍している同窓生がフェローとなり、グループワークや1対1の面談などで自身の経験や見識を伝え、学生のキャリア形成を支えていることだ。

長期留学に結びつけるための短期留学を奨励

「グローバル・リーダーの育成」は、今や多くの大学が掲げる目標だ。科学技術が発展し、ヒト・モノ・カネ、そして情報が国境を越えて自由に行き来する社会となり、国内にいてもグローバルな視野が欠かせなくなった。そうした時代における日本社会を牽引する人材を育むため、文部科学省は、2012年度に「グローバル人材育成推進事業（現・経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援）」をスタートさせ、各大学は様々な教育活動を展開している。

そのプログラムの1つに、北海道大学が2013年度に始めた全学共通の特別教育プログラム「新渡戸カレッジ」がある。これは、同大学の「4つの基本理念（フロンティア精神、国際性の涵養、全人教育、実学の重視）」に基づいて、高い精神性と異文化理解、コミュニケーション能力を身につけたグローバル人材の育成」を教育目標に掲げて、長期留学または複数の短期留学を必修とし、チームワーク力やリーダーシップ力、問題解決



北海道大学大学院文学研究科准教授
La Fay Michelle
ラフェイ・ミシェル
文学研究科国際交流室長。総長補佐。

力などを身につけていくプログラムだ。文学研究科国際交流室長で総長補佐も務める La Fay Michelle 准教授は、次のように説明する。

「グローバル・リーダーを目指す上で、実際に海外に長期滞在し、多様な背景を持つ人たちと一緒に学び、生活する経験は重要な意味を持ちます。しかし、本学には長期留学に行く学生がまだまだ少なく、その人数を増やすことが大きな課題です。学生にとって長期留学はハードルが高く、また費用面の不安もありますが、一度でも留学を経験すると、海外で学ぶ重要性に気づきます。そこで、まずは短期留学を支援するプログラムを充実させました」

同カレッジは、学部教育にプラスして任意で履修するものだ。入校対象は1・2年生で、希望者はプレイスメントテストの TOEFL ITP を

図1 「新渡戸カレッジ」のカリキュラム

ねらい	科目名等	授業の概要	単位数
グローバルコミュニケーションツールとしての英語力の育成	留学支援英語	英語を母語とする講師による、1クラス20人以下の少人数クラスで、実践的な英語を学ぶ。英語によるコミュニケーション能力の向上、留学時に必要なアカデミックスキルの修得を目指し、レベル別のクラスで展開。	4単位以上
	国際交流科目	原則として英語で行い、外国人留学生と日本人学生がともに履修できる科目。学際的・先端的なテーマで、入門レベルから専門レベルまで開講。	4単位以上
	英語による学部専門科目	各学部において開講される英語で行う専門科目。	
	日本文化・社会に関する理解増進科目	海外留学生を対象とした、複数の日本文化に関する講義を英語で開講。	
	海外留学	協定校等への原則1セメスター以上の留学。または、複数の短期留学の組み合わせ。	1単位以上
チームワーク力、リーダーシップ力の育成	フィールド型演習	20人程度の少人数クラスによる体験型演習。練習船「おしよ丸」の乗船訓練、農場での体験学習、演習林での環境学習など。	2単位以上
多文化状況の中での問題解決力の育成	多文化交流科目	原則として日本語で行い、外国人留学生と日本人学生がともに学ぶ問題解決型授業。	2単位以上
世界の中での日本人としての自覚の涵養とキャリア形成	新渡戸学	学内外の著名な教員等による講義、新渡戸カレッジフェロー等による講演や演習。	2単位以上 (新渡戸学1単位必修)
	ボランティア	NPO団体などで、ボランティア活動を行う。	
	インターンシップ	企業などで1～2週間のインターンシップを行う。派遣先は、国内だけでなく海外の企業もある。	

*同大学の資料を基に編集部で作成

受けて、スコアが500点以上であれば合格となる。16年度は1・2年生合わせて474人が受験し、264人が合格した。

同カレッジのカリキュラム(図1)のうち、「新渡戸学」「ボランティア」はカレッジ独自の科目で、ほかの科目は、全学教育科目などとして開講されている科目と、新規に開講した「留学支援英語」「多文化交流科目」だ。

それらの科目を「新渡戸カレッジ」の教育課程として体系化し、所属学部のGPA(*1)を含めた修了要件を設定して、それらを満たした学生には称号を付与する(図2)。グローバル・リーダーの候補生として、語学力や留学経験だけでなく、学部教育全体の成績も含めて質の高い学生であることを担保しているのだ。

図2 「新渡戸カレッジ」の修了要件

①～④の要件を満たした学生を修了生とし、英語・GPAの成績に応じて、3段階で称号を付与する。

- ① 指定科目を15単位以上修得
- ② 所属する学部での卒業認定
- ③ 英語能力の水準がTOEFL-iBT 80点以上
- ④ GPAが所属学部において上位50%以内

- **Summa cum Laude**
TOEFL-iBT 100点以上、GPA 上位15%以内
- **Magna cum Laude**
TOEFL-iBT 90点以上、GPA 上位30%以内
- **Cum Laude**
TOEFL-iBT 80点以上、GPA 上位50%以内

*同大学の資料を基に編集部で作成

留学や外国人留学生との交流で英語力を高める

同カレッジの特徴の1つは、グローバルなコミュニケーションツールとしての英語力の育成を、様々な面から図っていることだ。

まず、海外留学は、交換留学(交流協定大学への1セメスターか1年未満の留学)を推奨している。ただ、主に3年次後期から行く交換留学は学生にはハードルが高いため、複数の短期留学の組み合わせでも単位を取れるようにした。獣医学部3年の山下渚さんは、1年次の春休みに5



北海道大学
獣医学部共同獣医学課程3年
山下 渚 やました・なぎさ
新渡戸カレッジ2期生。大阪府・私立桃山学院高校卒業。

週間、オーストラリアの協定校での語学研修プログラムと、2年次の夏休みに「ファースト・ステップ・プログラム(FSP)」(2週間、イギリス、フィンランド)に参加した。「獣医学部には必修科目が多いため、長期留学は難しいと考えて短期留学にし、さらに長期休業中にある学部必修の実習期間を避けて、2つのプログラムを選びました。理系学部の学生でも、事前に計画を立てれば1か月程度の留学は可能です」

語学研修プログラムは語学研修と文化体験が中心だが、FSPは現地大学の授業体験や学生との交流、国際機関や企業の見学など、長期留学への意欲涵養を重視した内容だ。

「現地の学生とのディスカッションや、現地で働く日本人の

* 1 Grade Point Average の略。履修科目の評点に単位数を加味して算出する成績評価値。個々の学生の到達水準を測る目安に用いることができる。

職場訪問など、海外で学び、働くことをイメージできるようなプログラムとして「LaFay准教授」

費用面を支える奨学金も充実させた。留学期間を問わず、大学独自の海外留学奨学金、日本学生支援機構の留学生交流支援制度などの利用が可能であり、さらに、カレッジ独自に、ほかの奨学金との併用も可能な「北海道大学フロンティア基金新渡戸カレッジ(海外留学)奨学金」を創設。山下さんは、この奨学金と日本学生支援機構の奨学金を利用し、大いに助かったという。

英語で学ぶ科目で 生きた英語に触れる

「留学支援英語」で英語を学ぶ授業を充実させるとともに、英語で学ぶ「国際交流科目」も多彩な科目をそろえる。「国際交流科目」は、日本人学生と外国人留学生がともに履修でき、内容は倫理学、社会学、数学、生物学など、担当教員の専門分野となる。外国人教員だけでなく、日本人教員も英語で開講しており、山下さんは農学部日本人教員の科目を履修した。「受講生は中国人、オーストラリア

人、韓国人で、皆、日本語があまり上手ではなく、会話は英語のみでした。先生も含めてネイティブ・スピーカーではない人が多く、ネイティブ以外の英語を聞く練習にもなりました」

外国人留学生とともに授業を受ける科目として、「日本文化・社会に関する理解増進科目」や「多文化交流科目」もカリキュラムに組み込んでおり、彼らとの交流で英語力だけでなく、異文化理解も深まっていた。

「『多文化交流科目』で留学生と日本語で議論をして気づいたのは、言葉が違うから通じないのではなく、前提となる価値観が違うから話がかみ合わないのだということです。コミュニケーションの難しさを改めて感じました」(山下さん)

学部を超えた交流で 意欲と人間性を涵養

グローバル・リーダーに求められる人間性も、授業内外で育成する。授業では、チームワーク力やリーダーシップ力などを身につけていく場として、「フィールド型演習」を開講している。これは、大学の施設を利用した乗船訓練や農場体験などの



写真1 「フィールド型演習」の農場体験は、受講生が協力しながら牛や馬の世話をし、チームで協力する大切な、適切な役割分担の手法などを学び、たくましさも身につけていく。



写真2 「グループ・ミーティング」はフェローが学生の将来への意識を涵養する場だ。例えば、卒業後は就職か研究かのどちらかしか選べないと思いつている学生に、研究職としての就職があると伝え、視野を広げさせる。

実習科目で、受講生は協働で体験型演習に取り組む(写真1)。

授業外では、カレッジ生同士の交流の場を多数設けて、刺激を与え、視野を広げるとともに、コミュニケーション力を鍛えていく。例えば、1・2年生では20人程度のグループを設定し、定期的にミーティングを行い、自身の学びの計画を発表し合ったり、討論をしたりする。また、全学年が参加する年2回の合宿では、学年や学部を超えたチームでディスカッションや課題解決型学習に取り組む。「学生同士の多様な交流が生まれるように、グループワークの進め方やテーマは毎回工夫しています。講演

会後も単なる質疑応答ではなく、隣の席の人とディスカッションをさせることもあります」(LaFay准教授)

フェローの豊富な経験と知見が 学生の意識を揺さぶる

学生のキャリア支援では、各界で活躍する同窓生によるフェロー制度が重要な役割を果たす(図3)。1・2年生では、グループでの交流が中心で、フェローが自身の社会経験や人生経験を伝える(写真2)。3・4年生では、希望制によるフェローとの個別面談によって、学生の自己分析や将来へのキャリアを考えることにつなげ、行動に促していく。

図3 フェロー制度における活動

活動名	対象学年	概要
グループ・ミーティング	1・2年生	1年生は前期2回、2年生は年間を通して、少人数グループ(20人程度)で活動。活動の内容はフェローによって異なる。
学内合宿	全学年	5月と10月、全カレッジ生を対象に、学内で実施。1回目は、カレッジの仕組みや精神を理解すること、グループ内、担当フェローとの親睦を深めることが目的。2回目は、グループでのディスカッションやディベートなどの活動を通して、視野を広げ、コミュニケーションスキルを磨く場としている。
新渡戸カレッジ講演会シリーズ	全学年 (カレッジ生以外も聴講可)	教員やフェローによる講演会(全12回)。講演の後にグループワークを行うこともある。8回以上の受講・レポート提出で1単位取得。英語による講演の場合は英語でレポートを書く。
フェローゼミ	1年生	現代社会の諸問題を観察などの実体験を通して発見し、課題解決に向けたグループワークを行う。それらの活動を通して、チームワークの重要な要素を理解し、またそれらを活用する力を身につける。
対話プログラム	3・4年生	希望者がフェローと1対1の対話を行う。原則、学生の希望を優先してフェローを決定(事前予約制)。フェローの国際感覚や経験に接して、自身の考える力、行動力、チームワークなどを培うことをねらいとしている。
新渡戸カレッジキャリアセミナー	3・4年生	年3回実施。1回目はフェローやグループ内の話し合いで気づきを得ること、2回目は設定目標の実行状況を自己分析した上で、フェローと個別面談をし、目標の実現に向けて取り組みのレベルを向上させることがねらい。3回目はその後のフォローとして、フェローとのショート面談を実施する。

*同大学の資料を基に編集部で作成

フェローは現在31人。国際的な企業の管理職、国家公務員、NPO法人の代表など、各界でリーダーとして活躍する同窓生がそろう。年代も30代〜80代と幅広く、多彩な顔ぶれだ。

「フェローに相談をすると、単なるアドバイスではなく、自分で答えを出すために考えた方がよいことを教えてくれます。『海外で働く』など、自分では思いもつかなかった選択肢も示してくれて、考えの幅が広がります」

「道外に住むフェローもいますが、活動への参加率は高く、熱心に、しかも無償で協力していただいています。そのことは学生にも説明しており、フェローのボランティア精神にも学んでほしいと思っています」(La Fay 准教授)

視野が広がり、自分の可能性を探る学生たち

カレッジ開校から4年目となり、入校者のレベルは徐々に上がっている。実施初年度は入校基準をクリアする学生は少なかったが、今では入校定員を上回る人数が合格する。

「本カレッジに意欲的で、自分もしっかり準備をしてきていることが、入校希望者の英語力の高さから感じ取れます」(La Fay 准教授)

海外留学生数も、13年度の510人から、14年度は536人と増加し、うち110人が新渡戸カレッジ生だった。長期留学は難しいと考えていた山下さんも、今では学部の留学プログラムを利用して海外の研究の場に飛び込み、いろいろな経験を積みみたいと意欲的だ。

「海外でなければ学べない、研究できないこともあります。例えば、動物福祉学はヨーロッパが先進的で研究が盛んですし、日本には生息していない寄生虫やまだ日本に入っていない感染症をアフリカや東南アジアで標本調査し、研究している人もいます。先輩たちの話を聞くだけ

でなく、現地に行って自分もやってみたいと思うようになりました」

フェローの声からも学生の成長を感じ取れると、La Fay 准教授は言う。

「1年も経つと、グループワークでの積極的な発言するようになり、大勢の前でのプレゼンテーションも堂々とできるようになると、多くのフェローから聞いています。講演会のレポートを見ても、自分の考えをしっかりと述べていますし、英語のレポートでもびっしり書いてきます」

カレッジの活動を通して、学生は多様な刺激を受け、自身で考え、学びに向かい、将来を形づくっている。

「大学の学びは誰からも強制されません。自分で行動することが大事です。教科書に書いてあるから正解なのではなく、自分で納得するまで考える大切さを、北大に入り、カレッジで学んで感じています」(山下さん)

「今は完璧ではなくても、成長できるチャンスはいくらでもあります。恐れずに何でもチャレンジしてほしいと思います」(La Fay 准教授)